The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

パーリ聖典における輪廻と識についての一考察
——識の ava-√kram を中心に——

名　和　隆　乾

はじめに

DN 15（II pp.62–63）では，viññāṇa（以後，識）と nāmarūpa（以後，名色）の相互依存を含む縁起説が説かれる．ここでは識→名色という縁起関係は，識が mātu kucchi（母の腹）に ava-√kram（以後，ak）し，その後外れ出ないことと説明され，多くの先行研究がここでの識を，輪廻主体的性格を持つものと解する．筆者もこの見解に賛成である．だが，識が mātu kucchi に ak するとは，如何なる出来事を表しているのか．これについて，従来より『倶舎論』等に見られる，antarābhava を導入した輪廻説に基づく理解が提案されてきた[1]．しかしその様な説を，伝統教理では antarābhava を認めない上座部大寺派所伝のパーリ聖典に導入することの妥当性など，未だ議論の余地がある様に思われる．そこで本稿では，極力パーリ聖典に基づきつつ，識が mātu kucchi に ak するという表現の具体的内容を考察してみたい．また本稿では，パーリ聖典の段階で既に三世に渡る十二支縁起説が確認されることも指摘する．

1．DN 15 における識→名色：識が ak する

DN 15 における識→名色という縁起関係の内容について，本稿では次の2点に注目する：1. 識が mātu kucchi に ak し，その後も外れ出ないことで名色が成長し，人間が形成される．2. 入胎表現として「識が ak する」が用いられている．以下，2. の具体内容について，satta（存在者）[2] が ak する場合（DN 22 (II p.305), etc.）と比較しつつ考察を示すが，その前に ak の意味を確認する．

2．ak について：「入る」と「降下する」

誕生表現に用いられる ak の訳として，CPD（s.v. [1]o-kkamati, 1.b.）が挙げる様に，“to enter into（入る），to descend（降下する）”という程が考えられる．細かく言え

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ば，前者は「入る」動作に注目した訳，後者は「入る」動作と「降下する」動作を含めた訳である．誕生表現以外に用いられる場合を含め，パーリ聖典から ak の用例を渉猟すると，菩薩が兜率天から地上の mātu kucchi に ak する記述（DN 14 (II p.12), etc.）を除く殆どの用例では，ak する前後の位置関係が読み取り難い為，「降下」の動作が含まれるか否かの判断は困難な様に思われる．むしろ，「ある領域に入るか否か」に焦点があると考えられる文脈で ak が用いられることが多い様に思われる（この場合も「降下」の動作が含まれる可能性は排除できないが，それを積極的に支持する要素も見出し難い）．以下，「入るか否か」に焦点があると考えられる ak の用例を２つのみ挙げる：gāmaṃ **paviseyyā** 'ti parikkhittassa gāmassa parikkhepaṃ **atikkamantassa** āpatti pācittiyassa. aparikkhittassa gāmassa upacāraṃ **okkamantassa** āpatti pācittiyassa (Vin IV p.166)；purisassa hatthapāsaṃ **okkanta**matte āpatti thullaccayassa (Vin IV p.221)．以上ごく簡単に，ak が「入る」とも「降下する」とも解され得ることを確認した[3]．これにより，誕生表現に用いられる ak に関して，次の理解の可能性が考えられる．

「入る」と解する場合，ak は mātu kucchi に「入る」動作のみを表す．このとき死と再生の中間期間に言及はない為，死と再生の中間期間は前提とされているのでも，いないのでもあり得る．従って更に，次の２つのヴァリエーションが考えられる：「〔死と再生の中間期間なしに〕入る」（以後，ak1. Cf. 上座部大寺派などの，antarābhava を前提としない輪廻説）[4]；「〔死と再生の中間期間を経て〕入る」（ただし ak は死と再生の中間期間中の移動は含意しない．以後，ak1′）．一方，「降下する」と解する場合，「前世での死後，死と再生の中間期間を経て入る」（以後，ak2）という理解がまず考えられる（ak1′, ak2 については，cf.『倶舎論』などに見られる，antarābhava を導入した輪廻説）．更に，「降下する」は単に「（下方向に）入る」であって死と再生の中間期間を前提としないという，ak2′ なる理解も可能である．しかし本稿では ak2′ を ak1 のヴァリエーションに収め，以下，ak1，ak1′，ak2 の３つの可能性を考慮しつつ，これらの動作主が識の場合と satta の場合とについて考察する．

識/satta が ak1 する：「識が ak1 する」とは，前世から来世へ間断なく識が移動（転生）することを意味する．これは別視点から見れば，前世の satta と来世の satta とが，名称や形態を変えつつも間断なく連続することを表している．一方「satta が ak1 する」とは，前世から来世へ間断なく satta が移動（転生）することを意味する．これは実際には，satta は前世での身体を失いつつも，識は失わずに[5] 来世で再び satta として誕生することを表している．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

識/satta が ak1′ する：この場合については，次の ak2 と同様の仕方で死と再生の中間期間を経た識/satta が「入る」（このとき ak は死と再生の中間期間中の移動を含意しない）ことが述べられた表現と考えられる．

識/satta が ak2 する：「識が ak2 する」は，「前世での死後，識が死と再生の中間期間を経て mātu kucchi に入ること」を表す．だが，識が単独で死と再生の中間期間を経て母の腹に入るとは教理的に考え難い．そうではなく，諸先学（cf. n.1）が推測する様に，実際の出来事としては，前世での死後，識を構成要素とする satta となって，死と再生の中間期間を経て母の腹に入ることが想定されている，と解するのが自然である様に思われる．

以上見た3つの理解において，ak の動作主が識か satta かが異なっても，それぞれの表現が表す出来事自体に相違はない，換言すれば，識/satta が ak するという誕生表現は，同じ入胎という出来事を，それぞれ異なる視点から捉えたものと考えられる．DN 15 で「識が ak する」という表現が用いられているのは，その文脈が特に，識→名色の縁起関係を説明する箇所である為と考えられる．ただし ak1–2 のいずれで解するかによって，死と再生の中間期間を前提とするか否かに相違がある．

3．AN 3.61 における識→名色：gabbha（胎児）が ak する

上に見た他，誕生表現に用いられる ak の動作主として gabbha が挙げられるが，その1例として AN 3.61（I pp.176–177）を取り上げる．本経では，「（識を含む）6要素[6] → gabbhassa avakkanti →名色→ saḷāyatana → phassa → vedanā」という縁起の仕方で生まれ，感受する者にとっての四諦が述べられる．その四諦のうち，苦集諦の内容は十二支縁起説となっているが，これは「6要素」云々の縁起説の言い換えである．従ってこの十二支縁起説は，識と jāti の2支において転生を含む，三世に渡るものと考えられる[7]．また，ここでの十二支縁起説中の識→名色の内容は，6要素を取り込むことで gabbhassa avakkanti が成立し，名色が生じることを指す．ここでの ak の動作主は gabbha となっていて，識→名色の縁起関係をやはり胎生学的に述べる DN 15 が ak の動作主を識にするのとは相違する．しかし gabbhassa avakkanti という表現は，入胎という出来事について，入胎の結果側から ak の動作主を捉えた表現と考えられる[8]．つまり「gabbha が ak する」という表現も，「識/satta が ak する」という表現とは異なる視点から，同じ入胎という出来事を捉えたものと考えられる．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

4．パーリ聖典における，akを用いた誕生表現の理解

先述の様に，akを用いた誕生表現はak1–2のいずれで解するかにより，死と再生の中間期間を前提とするか否かが異なると考えられる．ではパーリ聖典において，akを用いた誕生表現は，如何に解されていたのか．以下に考察を試みる．本来なら用例を個々に検討すべきだが，今は主要例として，識のak（DN 15）と，菩薩のak（DN 14 (II p.12), etc.）を取り上げる．

DN 15における識のakでは，当該文脈の焦点は「識が入るか否か」にあると考えられる．これは先に見た，「ある領域に入るか否か」を問題とする文脈でakが用いられる場合と類似する．加えてDN 15の場合，次に見る菩薩のakとは異なり，識の入胎以前への言及がない．故に，DN 15では「識が入るか否か」に焦点があって死と再生の中間期間に言及はないとも解され得るが，ak2が意図されていた可能性も排除できず，どちらとも決し難い様に思われる．

だが菩薩のakの場合，菩薩は兜率天から死去（√cyu）し，地上のmātu kucchiにakする．この時，兜率天と地上の母親との間には距離がある．この状況でakが，兜率天から地上までの移動を含意しない，つまり兜率天における死去後，瞬時にmātu kucchiにak1することが意図されていたとは，考え難い様に思われる[9]．また，死と再生の中間期間に言及していると考えられる1例として，SN 44. 9 (IV pp.399–400）を挙げる事ができる．ただこうした用例は，管見の限り，パーリ聖典ではごく稀である．以上を総合すると，パーリ聖典におけるakを用いた誕生表現に関して，本来は死と再生の間には期間があると解されていたが，そうした期間に関心が向けられることは殆どなかったと考えられる．

まとめ

本稿の主な議論は次の様に，3点にまとめられる：1.「識/satta/gabbhaがakする」という誕生表現は，同じ入胎という出来事を，それぞれ異なる視点から捉えたものと考えられる．DN 15で「識がakする」という表現が用いられるのは，その文脈が特に，識→名色の縁起関係を説明する箇所である為と考えられる．2. akを用いた誕生表現は，パーリ聖典では本来，死と再生の中間期間を前提として解されていたが，そうした期間には殆ど関心は向けられなかったと考えられる．後代，そうした中間期間を認める，または認めない輪廻説が成立するが，akを用いた誕生表現は，どちらの輪廻説を採用するかによって，ak1–2のいずれかで解

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

されたと考えられる．3. AN 3. 61 では，三世に渡る十二支縁起説が確認される．

---

*紙幅の都合で口頭発表資料より部分的に割愛した．本稿における一次・二次文献の略号や書誌情報は Lambert Schmithausen, *The Genesis of Yogācāra-Vijñānavāda: Responses and Reflections*, Tokyo: International Institute for Buddhist Studies of the International College for Postgraduate Buddhist Studies, 2014（以後，Schmithausen (2014)）参照．

1）Cf. Wijesekera (1964), Vetter (1988), etc.　2）「識/satta が ak する」という表現では，ak の動作主は，入胎する側，または入胎の結果側，または（入胎の前後に関係のない）通時的視点から捉えられている可能性が考えられる．後述する gabbha の ak とは異なり，この 2 語は入胎の前後で名称が変化しない為である．Cf. Schmithausen (1987: §§ 7.3.4.1.3.b–c; 2000: pp.60–61)，後藤敏文「サッティヤ *satyá-*（古インドアーリヤ語「実在」）とウースィア οὐσία（古ギリシャ語「実体」）――インドの辿った道と辿らなかった道と――」『古典学の再構築』9，2001，§ 12.　3）誕生表現に用いられる ak は，漢訳仏典で「入」（『長阿含経』T vol.1, p.61b9）や「下」（『人本欲生経』T vol.1, p.243b18）等と訳されることがある．　4）パーリ註釈は ak を用いた誕生表現を，「前世から来世へと間断なく再結合（paṭisandhi）によって母の腹に生じるが，それは『入る（praviś)』（かの如く）とも表され得る」という程に解していると考えられる．Cf. Sv II p.502, III p.885, Mp I p.282, etc.　5）Cf. MN 43 (I p.296). Cf. also Schmithausen (2014: n.170).　6）Cf. Bhikku Bodhi, *The Numerical Discourses of the Buddha*, Boston: Wisdom Publications, 2012, p.1649, n.437.　7）ただし，cf. Bodhi, op. cit., p.1649, n.438.　8）Cf. 西村直子「ヴェーダ文献における胎児の発生と輪廻説」『論集』36, 2009, p.83, n.42. Mil p.129 では，入胎の結果生まれる子の名“Sāma”が，誕生表現の ak の動作主として謂わば先取りして用いられる．Cf. also n. 2).　9）*Bṛhadāraṇyakopaniṣad* IV 4, 2 における Yājñavalkya の教説では，地上へ降下転生することを表す動詞として anu-ak が用いられる．Cf. 後藤敏文「「業」と「輪廻」――ヴェーダから仏教へ――」『印度哲学仏教学』24, 2009, pp.18–19.

(JSPS 特別研究員奨励費（課題番号: 251004）による研究成果の一部)

〈キーワード〉 saṃsāra, vijñāna, viññāṇa, antarābhava, 輪廻, 識, 中有

（日本学術振興会特別研究員）

NII-Electronic Library Service